

「はじめての万葉集」

みなさんは、万葉集のことをどのくらいご存知でしょうか。万葉集には遠い昔の風景や人々の思いが歌で綴られています。現在、日本のあちこちに「万葉植物園」が造られたり、「万葉の旅」と銘打った旅行が催されたりしています。きらめき講座でも「はじめての万葉集」は「源氏物語」と並んで人気の講座の一つです。講師の市瀬 雅之さんは大学での講義の他に、毎日文化センターや神戸新聞文化センターで万葉集や日本書紀の生涯学習講座を担当されています。そして、万葉集を古典文学として読むほかに、観光資源として活用するためのフィールドワークについても研究しておられます。今回は万葉集の面白さについて研究の一端を語っていただきました。

■万葉集とはどのような歌集ですか

万葉集は、現在日本に残されているもっとも古い歌集です。飛鳥時代から奈良時代の100年余りを経て、天皇や貴族、地方役人、防人などいろいろな身分の人々の詠んだ歌が全20巻に約4,500首収められています。全巻同時期に編さんされたのではなく、長期にわたってつくられたようで、勅撰説や伴家持説などがあります。ただ、現在では最終的にまとめたのが家持といわれています。家持の家は、宮廷を警護する武門の家柄ですが、和歌など文化的な技芸にも優れており、家持も若いときから伯母さんたちに歌の手ほどきを受けていました。

万葉集の歌の内容は、国の行事で天皇が詠んだ歌から、官人たちの旅の歌や恋の歌、死を悲しむ歌、労働の歌や愚痴、他人の悪口、中には意味のない歌を詠んで褒美を貰ったなどというものもあります。天皇やまわりの貴族たちの歌が多いのですが、地方に暮らす人が生活の中で口にしたであろう歌まで収められているところがこの歌集の大きな魅力です。その中に防人の詠んだ歌があります。防人とは3年に一度3000人が東国から集められ、九州に向かい見張り番をする人のことです。なにわで

防人を集める役人をしていいた家持は、防人を連れてくる役の部領使たちに、日ごろ歌ったものや知っているものをまとめて出さないと命じていたようです。天平勝宝7年(755年)にその人たちから歌を集めたのです。また、作者を記さない歌などは、宮中にあった歌舞所という役所が集めています。歌というのは口で詠むものなので、字が書けなくてもよかったです。集まった歌の発音を漢字に当てて書き留めていくのは役人の仕事でした。

歌の定型は5、7、5、7、7が連想されやすいのですが、はじめからこのリズムが完成していたわけではありません。万葉集の1番の歌のリズムは3音であったり、4音であったりして調子がよければ何でもよかったようです。コミュニケーションとしては5、7、7で問いかけたり、応えたりする形も残っています。それがだんだんと一番聞き心地のよい定型に落ち着いていきました。このプロセスを知ることができるのも万葉集の魅力の一つです。さらに魅力といえば、「万葉仮名」があります。独自の文字を持たなかった日本人が、漢字を使って書き記していくための工夫や、その中に遊び心も忘れられない、柔軟な感性を知ることができるのも

この歌集ならではの楽しみです。

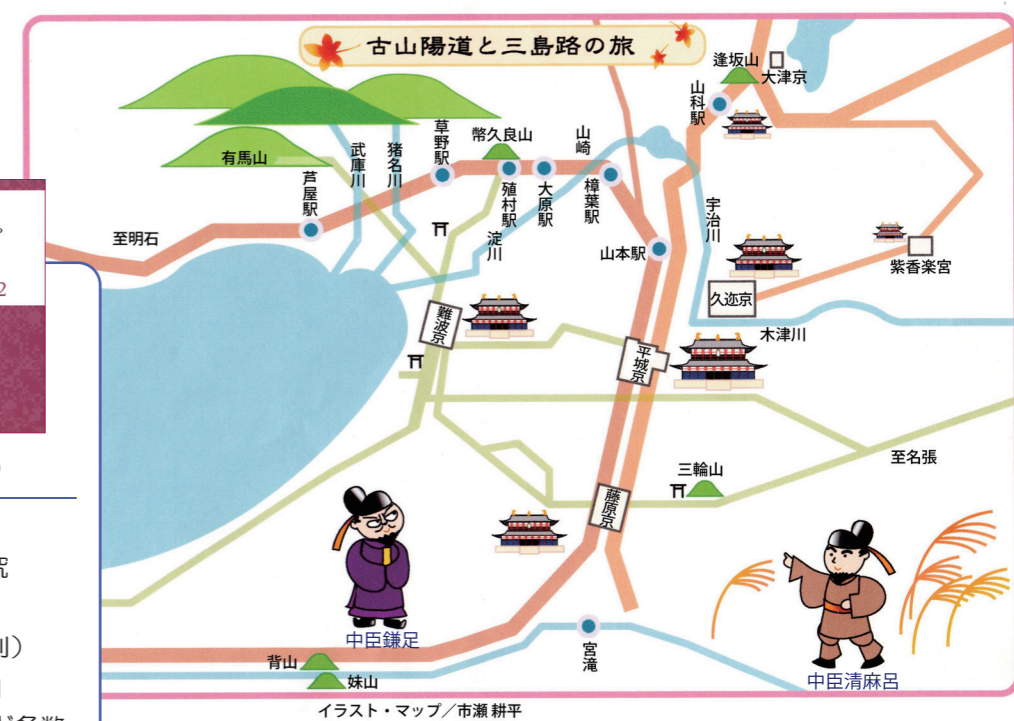
■万葉集が作られるきっかけと、できあがるまでの苦労

この時代には遣隋使や遣唐使が中国から漢詩や仏教教典を持ち帰ってきたので、写し書きで広まり、この頃の役人は漢字を書くことはできました。ところが、歌を書く習慣がなかったため、文字にまとめた歌集などはなかったのです。中国との文化交流が行なわれると、日本にもあなたたちの国にないこんな歌集があるのですよと見せなければなりません。そこで、天皇が勅命をだし、国の施策として歌集づくりがはじまったのです。そして、自分たちの大和言葉の歌を漢字の音や訓を当てて書いたのです。これが万葉仮名のおこりです。ただ、歌に漢字を当てていくというのは大変だったようです。万葉仮名の母音の数は今より多いので、今の私たちがのようなアクセントでは歌っていませんでした。そして、みんながあちこちで小さな歌巻を借りて写しながら切り取ったり、継ぎ足したりしてできあがっていったのです(巻物は切り貼りするのに都合がよかった)。印刷技術のない時代には写し間違いや読めない漢字を替えてしまうようなこともありました。実は、万葉集の原本は見



市瀬 雅之 (いちのせ まさゆき)

梅花女子大学文化表現学部 教授
文学博士 日本文学(上代)の研究
<著書>
「万葉集編さん構想論」(笠間書院刊)
「北大阪に眠る古代天皇と貴族たち」
(梅花学園生涯学習センター刊) など多数



つかっていません。今、万葉集といわれているのは研究者がいろいろな写本からまとめたものなのです。

■万葉集には茨木に関する歌もあるのでしょうか

万葉集を読む楽しみ方はいろいろあるのですが、地名を詠み込んだ歌がたくさん収められています。万葉集を片手に辿って行くと日本のほとんどを訪ねることができます。茨木市を含む三島方面にはこんな歌があります。

「三島江の 玉江の蘆を 標めしより
己がとぞ思ふ いまだ刈らねど」
(巻7・1348番歌)

雄大な三島江(淀川)に生えている立派な蘆をひもで縛って印をつけたときから、自分のものだと思っています、まだ刈ってはいませんが・・・と詠まれています。淀川に生えている立派な蘆は、土地に住む人たちにとって貴重な資源です。作品に喩法を用い、蘆に恋した女性を例えています。まだ告白していませんが、彼女は自分のものだと主張しているのです。この歌には女性の側から次のような歌が詠まれています。

「三島江の 入江の蘆を 刈りにこそ
我をば君を 思ひたりけれ」
(巻11・2766番歌)

(口だけでぐずぐず言っていないで)三島の川の入江に生えている蘆を刈ってこそ、「私はあなたを思っています」ということになるのでしょうかと返しています。

「三島管 いまだ苗なり 時待たば
着ずやなりなむ 三島管笠」
(巻11・2836番歌)

これは男性が女性の成長を待っている歌です。

これらの歌には作者が記されていませんが、三島に住む人が詠んだとして解釈しています。もし、都人が詠んだとすれば、奈良から見た三島地方は蘆や菅の名産地として知られていたこととなります。

奈良の都と茨木市は山陽道(西国街道)で結ばれていました。阿蘇神社や阿武山古墳等に中臣鎌足の歴史や伝承を訪ねることができます。その鎌足も万葉集に恋歌を詠んでいます。山陽道と接する御弊久良(現在の茨木市耳原付近)には難波宮へとつづく三島路が通っていました。難波宮から紫香楽宮に向かった聖武天

皇はこの道を使いました。私は万葉集を古典文学として部屋の中で読むほかに、観光資源に結びつけるフィールドワークの研究もしています。研究室のドアにはそれをイラストにして貼っています。茨木市を起点に、日本全国へと読み広げると、海の向こうまで見渡すことができます。

■万葉集は世界に日本の文化を示す貴重な作品

どこの国でもそうですが、人が集まって暮らし始めると国になり、独自の文化が生まれます。言葉はその典型です。他の国と対等につき合っていないとすると、自分たちの文化をみせることが求められる場面ができます。中国の漢詩などに対して、日本らしい文化をみせることができたのが歌でした。万葉集のはじめを読んでいると、その意気込みが感じられますし、遣唐使として中国に渡った経験を持つ山上憶良は、帰国してからわざわざ日本挽歌と「日本」をつけた歌を詠んでいたります。万葉集が単に日本国内の文化を知るための歌集ではなく、海外に目を向けながら編まれているところも、この歌集の大きな魅力の一つです。